(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	人工呼吸器の装着を選択しなかった筋萎縮性側索硬化症患者の訪問看護を通しての一考察
演者名	関 りゅう子 1) 加藤晴美 1) 藤野麻子 1) 菊池浩美 1) 宮澤リツ子 2)
所属	1) 盛岡市医師会訪問看護ステーション 2) 盛岡市医師会指定居宅介護支援事業所

目的

当ステーションでは常に 10 名前後の人工呼吸器を装着している患者への訪問看護を行っている。今回、人工呼吸器の装着を選択しなかった 60 歳代・女性の訪問看護を実施する機会を得たが、病状の進行に伴う呼吸困難は容易に緩和できなかった。そこで看護の過程を振り返り訪問看護師に期待されることは何かを検討した。

実践内容

患者は、平成 X 年 8 月に筋萎縮性側索硬化症と診断されたが人工呼吸器の装着を希望しなかった。平成 XX 年 2 月には、球麻痺が進行し、構音障害・嚥下困難・四肢脱力・喀痰喀出困難・胃瘻造設の状態であった。主な介護者は長女だが日中は仕事をしているため独居状態であり、胃瘻注入及び病状管理のため日曜日を除く連日、昼・夕の 1 日 2 回の訪問看護が開始となった。

病状の進行に伴い、喀痰排出困難による呼吸苦が出現しテーブルに伏して休んでいる姿が多く見られるようになってきた。吸引等の医療的ケアを強く勧めたが、拒否することが多かった。吸引等の医療行為による苦痛除去がこの人の希望することではないと考え、以後は本人の意思を尊重して、「帰らないでもう少し側にいて欲しい」「明日は早く来て欲しい」「貴女に来て欲しい」等の一見わがままとも思える要望でも可能な限り対応するという寄り添いの方針にした。

実践効果

病状の進行に伴い呼吸苦及びに不定愁訴が多かったが、医療的な処置を優先せず見守ったり、寄り添ったりすることで本人の精神的な不安や苦痛は軽減された。指先に力が入らず、細かい労作が困難な状況にあっても、娘の弁当作りや洗濯等の家事を続け、母としての役割を十分果たすことができた。

考察

本当に悩んでいることは体ではなく心であることがある。医療的処置だけでは心の苦痛は取り切れないということを常に念頭におくべきである。本事例においては、寄り添い見守ることで本人の生き方の尊重になったと考えた。